

〔賤のをだ巻〕一男女の髪も、其頃はさまざまに替りたり、先男の相應の生れ付にて、前髪のあるうちは、おさへ元結とて、頭の上へ元結を掛、左右へ分て耳の後より下げ髪ゆはする人が、兩手にておさへてもつ、是は撥下びんとて、若衆はもみ上ゲの所へ、びんをかき下ゲ、夫を丸く上へかき上て、扱髪ををさつ、好次第にゆひたり、紀州の百姓如此、彼百姓の髪は大きくなる結様なりけり、扱野郎あたまは、ぞべ本多とて、中剃をいかにも廣くそり、髪の間より、中剃のみゆるやうにして、根はゆるくつけ、□□との間纔にして、月代へのぞきたるやうに、まさかけて置たり、多く堺町邊の歌舞妓者のあたまつきに、歴々にも若き人達は随分其如くゆはせて、上下著て公儀勤る有様、不相應のあたまなり、又豆本多と云は至極髪をつめて、尤少くしてわけをいかにも小さく、豆粒の如く結ふたるなり、又其後遊士俗客ははげを殊の外長くのばして、大抵額へ押付届くほどにしてゆひたり、又だまされた風とて、町家の若者などは、鬢口を甚薄く剃下げ、夫より段々後ろ高にて、髪を結ひたり、是をだまされた風といへり、又卷鬢とて、鬢の毛を上へ搔上げ、きはにて卷込ゆひたり、いづれもかの文金風より後の事なり、

〔半日閑話 十二〕明和五年十二月十三日、公にて女御御入内の御祝儀惣出仕有之、近來男子の風甚美にして、髪は本多とて、中剃を大きくして、鬢を高く結ふ、鬢は下鬢とて、油をつけず、櫛の齒を入、毛筋を通し、後の方は油をつけ可置、其堺を潮堺と云、眉は三日月とて細くぬく、衣服は細袖に薄綿にて、重て著るに便にす、此頃の諺に云、疫病本多瀬眉宿なし姿、

〔屠龍工隨筆〕渡が妻の、盛遠に討れん爲に、髪をさばきて寝たると有は、古は皆惣髪なれば、髪につりて寝にくきゆへに、多くは髪をさばきたると見えたり、

〔倭訓栞 中編 十一〕すみまへがみ 角前髪なり、京大坂に、すんまといひ、肥前佐賀にてあまじほといひ、肥後にてかどひといひ、薩摩にてりはといひ、上總にてこびたひといふ、